学術委員会企画シンポジウム

がん対策を支えるがん登録

MIYASHIRO Isao
宮代 勲
大阪国際がんセンター　がん対策センター
JACR 副理事長

令和５年６月９日、第３２回学術集会（青森）において、学術委員会企画シンポジウム「がん対策を支えるがん登録①～がんと診断されたら…受療動向を知る」の座長を学術集会事務局の松坂理事とともに担当しました。

数年ぶりの現地開催となった第３２回学術集会で復活した「学術委員会企画シンポジウム」は、第２１回（高知）から第２６回（愛媛）までの学術集会で毎回設けられていました。令和２年に私が学術委員会委員長を引き継いだ際、学術集会では開催地の特色を持たせる一方、継続性を考慮したセッションを設けることがJACR としては望ましいと申し送られていました。

復活させるにあたり、学術委員会でテーマと演者を選定し、がん登録情報を用いて受療動向をどのようにみるのかというテーマを抄録作成段階のウェブ会議で意識共有しました。最初に診療情報管理士の石田さん（大阪国際がんセンター）、つづいて西野先生（金沢医科大学）、田中先生（弘前大学）、伊藤先生（愛知県がんセンター）の計４名に発表いただきました。最初の演者が院内がん登録についても言及したものの、全演者とも地域がん登録の活用事例だったのは当初の想定と異なりましたが、カバー率（正しくはカバー割合）の議論においては定義を明確にすることが重要である等、会場からも多くの発言があり、総合討論の時間が不足しがちと、座長としては嬉しい悩みが生じたシンポジウムとなりました。

来年、第３３回（島根）での学術委員会企画シンポジウム「がん対策を支えるがん登録②」もご期待ください。

学術集会企画シンポジウム

がん登録を利用した がん検診の精度管理

KANEMURA Seiki
金村　政輝
宮城県立がんセンター研究所 / JACR 理事

シンポジウムは、学術集会テーマ「国際標準のがん登録を目指して」を踏まえ、大会長の斎藤博先生とプログラム委員長の松坂方士先生の意向により企画されました。平成２８年のがん登録推進法の施行により全国がん登録が開始され、精度の高いがん登録情報の利用が可能となったことから、がん検診の精度管理への活用も期待されています。がん検診は、科学的に有効性が証明された検診を正しく行うことで、目的であるがん死亡の減少を期待出来ます。そのためには、がん登録を利用した精度管理が重要です。シンポジウムでは、精度管理の手法を検討している厚生労働科学研究費・松坂班の班員である３名の演者にご登壇いただき、これまでの経験や知見についてご講演いただきました。

佐久総合病院の雑賀公美子先生からは、先行事例のすべてに深く関わられているお立場から、がん検診の基本的な仕組みの説明、そして、実際にがん登録情報を利用した精度管理を行うために必要なことについてご講演いただきました。

島根大学の京哲先生からは、島根県における子宮頸がん検診の現状と問題点の説明、さらに、課題を解決するため、どのように精度管理を実現したのかについてご講演いただきました。

和歌山県立医科大学の井口幹崇先生からは、和歌山県において、和歌山市のがん検診の精度管理（胃、大腸、肺、乳房、子宮頸部）をどのように実現したのか、また、実施によってどのようなことが明らかになったのかについてご講演いただきました。

最後に、各演者から今後の課題についてコメントを頂戴し、終了となりましたが、先行事例について詳しいお話をいただき、大変勉強になるものでした。

がん登録を利用した精度管理を実現するためには、都道府県などの関係者と協力しながら、課題をひとつずつクリアしていく必要があります。今後の学術集会等においても、継続的なテーマとして取り上げていただくことを願っております。